護生画集

―― ごせいがしゅう ――

護生画集 ごせいがしゅう

—思いやりのある優しい心の物語

動物は
人間と一緒に笑ったり
時には
人間のために泣いたりもする

目次

前書き　釋悟謹　6
一　反哺　10
二　母鹿随啼　12
三　已死的母熊　14
四　葬母　16
五　猫殉主　18
六　跛狗　20
七　清明　22
八　隣居　26
九　托孤　28

十　白驢殉主……30
十一　懺悔……32
十二　一方絲羅巾　千百春蠶命……34
十三　蛻化……36
十四　人之初性本善……38
十五　酬謝……40
十六　緝獲兇手……42
十七　舊雨重逢……44
十八　焚弓折箭……48
十九　爲母乞命……51
二十　收養……54
二十一　垂死的犬……57

二十二 救傷 …… 60
二十三 盲狗待哺 …… 63
二十四 一犬不至　群犬不食 …… 66
二十五 翡翠雙棲 …… 69
二十六 逞藝傷生 …… 72
二十七 放魚 …… 75
二十八 報告火警 …… 78
二十九 救命 …… 81
三十 我喫素 …… 84
三十一 靈犬 …… 87
三十二 運糧 …… 90
三十三 兒戲 …… 93

前書き

釋悟謹

中国芸術文化を煌びやかせた先導者とも称される弘一法師（1880～1942）は、仏法修養のみならず、詩・書・絵・彫刻・音楽・文学などの芸術才気をも備えた一代高僧として、中国ではもちろん、出家前に李叔同という俗名で、留学していた先の日本でも、広く知られ、尊ばれている。彼の出家前からの弟子である豊子愷居士（1898～1975）は、西暦一九二八年（中華民國十七年）、恩師の誕生日を記念するために『護生画集』を制作する事を発意し、十年毎に篇数を増やして、制作・発表していくことを弘一法師と約束した。

第一集の『護生画集』は、弘一法師が書いた詩五十篇と、豊子愷が描いた五十枚の絵を合わせ、弘一法師の五十歳の誕生日記念に制作した。

『護生画集』第二集は、法師の歳の数に合わせ、弘一法師が六十の詩を書き、豊子愷が六十の絵を描いて、恩師の六十の誕生日を記念し、制作した。

弘一法師は第三集の『護生画集』を目にする事なく、六十二歳で円寂したが、豊子愷は恩師との約束を守り、法師の円寂後も、『護生画集』を制作し、十年毎に発表し続けて、弘一法師が生きていれば百歳になる年に、詩百篇と絵百枚からなる『護生画集』第六集を完成した。豊子愷の、『護生画集』を

制作するという発意や願いは、ようやくここで円満に達成された。

唯残念なのは、豊子愷は第六集が出版される前に逝去したことである。

日本留学の時に竹久夢二の画風に魅かれ、影響を受けたという豊子愷の絵は感情豊かで、ノーベル文学賞を受賞したインドの大文豪、タゴール（Tagor 1861～1941）はこのように褒め称えている。

――「豊子愷の作品は、詩と絵の具体結合であって、創造である。」――

その豊子愷居士は、戦争で皆が落ち着く所のないような時代背景の中で、恩師との約束を守り、恩師の生誕を記念したいために、『護生画集』作りに

自身の半生―歳月にして四十六年間を掛け、身も心も捧げた。
その精神には、我々は本当に及ぶ事ができない。

今回、六冊の『護生画集』全四百五十篇の中から、三十三篇を選りすぐり、日本語に訳して、一冊の『護生画集』としてまとめた。本書をきっかけとして、自分自身を見つめ、心を美しく持ち、慈悲心が養われる事を願うとともに、命あるものを大切にし、保護するという意識が、日常生活の中に着実に根付く事を祈る。

一　反哺（育み返す）

『護生画集』第五集より

カラス　カラス　私に向かって叫ぶ。
カラス　カラス　誠に親孝行。
年寄りカラスは飛べず、子カラスに向かって鳴く。
子カラスは、毎朝食べ物を探し、
家に持ち帰って、一番先に母カラスに食べさせる。
ああ、母も昔こうして私を育ててくれた事は、いつまでも忘れない・・・

反哺

二　母鹿随啼（母鹿が泣きながらついてくる）

『護生画集』第六集より

昔、孟孫（モン　スォン）という国王がいた。ある日、彼は狩猟に出掛け、子鹿を生きたまま捕まえた。そして秦西巴（チン　シー　パー）という名の侍従に、先に子鹿を宮殿に連れて帰るよう命じ、自分は狩猟を続けた。

秦西巴が子鹿を乗せた馬車を走らせていたとき、彼は、母鹿が泣きながら、ずっと後をついてきていることに気がついた。

仁慈な秦西巴は、この親子を離ればなれをさせるのを不憫に思い、馬車を止め、子鹿を放そうと決断した。

母豚遊戯

三　已死的母熊（死んだ母熊）

『護生画集』第二集より

狩猟をしに山に入った狩人が、発見した母熊の急所に玉を命中させた。

しかし、撃たれた母熊がちゃんと座って倒れなかった事を不思議に思ったので、狩人が近付いて見ると、なんと母熊は、ある大きな石を抱えたまま死んでいた。

その大きな石の下には渓流の水が流れていて、三匹の子熊が水遊びをしている。

母熊が子熊達に大きな石が直撃するのを防ぐため、死んでも石を放さなかったのを悟った狩人は、母熊の行為に感動し、二度と狩猟をしないと誓った。

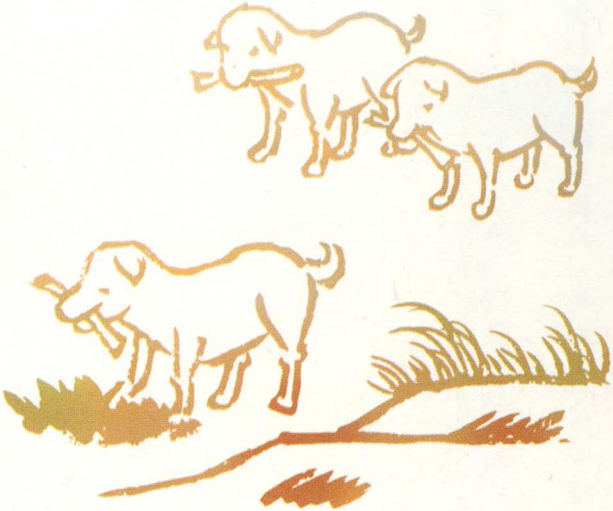
已死的母熊

四　葬母（母を葬る）

『護生画集』第四集より

昔、淮安城（ウハイ アン ツォン）という所に、飼っている母犬を殺し
煮て食べてしまった家があった。残された三匹の子犬は、
地に捨てられた母犬の骨を見て、顔を地面に伏せ悲しく泣いた。
そして地面に穴を掘り、骨を一本ずつ口でくわえて穴に入れ、土で埋めた。
子犬達は母犬を埋め終えても、埋めた所で悲しく泣き続けた。
近所の人たちはこの光景を見て、皆、嘆息した。この話は皆の口によって
全村に行き渡り、この子犬達は「孝行犬」だと称された。

葬母



五　猫殉主（猫は主人に殉ず）

『護生画集』第六集より

江蘇(チャン　スー)省江寧(チャン　ニン)県にいる王(ワン)御史(官名)の父親には、猫が大好きな七十歳になる妾がいた。妾さんは十三匹の猫を飼っていて、子供のように可愛がった上、それぞれに名前を付けていた。名前を呼ばれた猫も妾さんに答えるようにちゃんと寄ってきた。清朝乾隆己酉年に、老いた妾さんが亡くなったとき、飼われていた十三匹の猫はすべて、三日間飲まず食わずで棺を囲み、死ぬまで泣き続けた。

猫殉主

六　跛狗（びっこをひく犬）

『護生画集』第五集より

この小犬の遅い動きは独特である。

詳しく見ればなんと一本の足が使えないほど曲がっている。

多分・・・昔、盗み食いをして、人間に殴られたのだろう。

人間は自分達を万物の中で一番だと自負し、犬などを畜生と見なす。

だが、許せないほどの罪を犯した訳でない犬をそこまで傷付けるなんて・・・

人間って残酷すぎるのではないだろうか？

跛狗

七　清明（清明）

『護生画集』第四集より

孫呉（スォン　ウー）時代に襄陽（シァン　ヤン）人、紀信純（チー　シン　ジュン）は烏龍という名の名犬を飼っていた。彼がどこへ行くにも烏龍は付いて行く。ある日、彼は城外の友人に呼ばれ宴会に出席して、たいへん酔ったため、家へ帰る途中、わらのそばで横になってそのまま寝てしまった。そこへちょうど鄧瑕（トン　シャー）という官員が狩猟に来て、わらに隠れている動物を追い出すため、わらに火を付けた。紀信純は全然気付かずにそのまま熟睡している。火が段々大きく燃えてくるのを見て、烏龍は一所懸命、彼の

清明

衣服を噛み、何とか彼を起こそうとしたが、紀信純はちっとも動こうとしない。
その時、烏龍は近くの渓流に水が流れているのを見つけ、渓流に飛び込み
自分の全身を濡らした。そして紀信純に火が燃え移らないよう、濡れた身体で
彼の周りを転げ回り、わらや草を濡らした。しかし、最後はもう一度自分を
濡らしに行くのが間に合わないため、そのまま火の上で転がって、自分の体を
使って火を消そうと頑張った。烏龍のおかげで紀信純は火に焼ける事はなかっ
たが、犬は彼のために死んでしまった。
紀信純は酔いから覚めて、自分の周り以外のわらや草がすべて燃え尽き、毛が
濡れた状態で愛犬が死んでしまっているのを見てはじめて何が起きたのかを

知り、とても心を痛め大泣きした。その泣き声を聞いて、狩猟に来ていた官員とその侍従は、彼を探し、訳を尋ねた。皆は紀信純が泣く理由を聞いて、烏龍の行為に嘆息した。そして、官員は侍従に棺を買ってくるよう命じ、烏龍に衣服を着せ、人間がするのと同じように、葬式を行い、礼儀を尽くして、烏龍にお墓を作り埋めた。今でも、この「義犬墓」は存在している！

＊ 清明　二十四節気の五番目。
中国では、この頃にお墓参りをする習慣がある。

八　隣居（隣人）

『護生画集』第四集より

常州人、陳四は白色と黒色の雌鵞鳥(ガチョウ)を一羽ずつ飼っていた。
それぞれの雌鵞鳥はそれぞれの巣を持ち、それぞれの子鵞鳥を孵した。
ある日、黒い鵞鳥が死んで、一日中悲しく鳴いている子鵞鳥だけが残された。
その日から、白い鵞鳥は毎朝、黒い鵞鳥の巣まで行き、
白い子鵞鳥らと一緒に、黒い子鵞鳥らを連れて畑へ食べ物を探しに行った。
そして夜になれば、必ず先に黒い子鵞鳥らを巣まで送り届けてから、
自分たちの巣に戻った。知っている人達は皆、白い鵞鳥の義気を称した。

鄰居

九　托孤（孤児を托す）

『護生画集』第四集より

唐朝時代、北平（ペイピン）の王（ワン）さんは雌猫二匹を飼っていた。
この二匹の雌猫は同時に子猫を生んだけれど、一匹は産後すぐに亡くなり、
産まれたばかりの子猫らはお腹が空いて悲しく泣いていた。
もう一匹の母猫は、ちょうど自分が生んだ子猫らにお乳をやっていたときに、
悲しい泣き声を聞いて、餓死寸前の子猫らを発見し、
口で一匹ずつくわえて自分の場所に連れ帰り、自分の子のように育てた。

托猴

十　白驢殉主（白い驢馬は主人に殉ず）

『護生画集』第四集より

明朝末、流賊、李自成(リー　ツー　ツォン)が四川省を攻め破った時に、城を守る主将と、その家族、使用人たちは、全員井戸に身を投げ、自殺によって国に殉じ、とても忠義悲壮であった。

主将の白い驢馬(ロバ)は、その光景をそばで見て、不安に跳ね続け、最後に後を追って、井戸に飛び込み、主人に殉じた。

白驢洵主

十一　懺悔（懺悔）

『護生画集』第一集より

私達は崇高で才徳のある人ではないので、過ちを犯すことは避けられない。
しみを付けてしまった衣服を綺麗に洗濯するように、
哀れみ深い心を持ち、懺悔し、過ちを認め直せば、
私達が接する世間の万物はいっそう美しく感じられる。

懺悔

十二　一方絲羅巾　千百春蠶命

（絹のスカーフ一枚　春蚕の命幾つ）

『護生画集』第五集より

賑やかな都会を離れ、静かな隠居生活を送る。
更に人間が行う殺生行為を嫌い、自分は蓮根の糸で編み上げた衣服を着る。
絹の衣服を着る時と同じ肌触りの良さを感じられ、
と同時に春蚕を殺さなくて済む。
ああ、春蚕の命も大切だ！

一方係羅巾　千百春醫命

十三　蛻化（脱皮）

『護生画集』第五集より

毛虫は醜いけど殺さないでね。
春になれば綺麗な蝶々になって、
景色をいっそう美しく引き立たせてくれる。

蛻化

十四　人之初性本善（人間の本性は皆、善である）

『護生画集』第三集より

生き物は生きる権利を求める本能を持っており、
人々はその生き物を大切にしているはずである。が、
鶏が、包丁をもつ料理人を見て、驚いて跳ねたりしている。
豚が、屠殺業者の値段交渉を聞いて、涙を泉のように流したりしている。
動物にも自分に大難がやってくる事がはっきりと判っている。
ただただ、口があっても言葉を言えないでいる・・・

人之初
性本善

十五　酬謝（報いる）

『護生画集』第四集より

昔、華容（ハァン　ロン）県のある農家へ、足に大きな木が刺さった象がやってきた。苦しそうな様子で、庭で横になっているのを、その家に住んでいる農民が見つけ、足に刺さった大きな木を取り除いたうえ、傷口を治療した。象は完治してから、農民を背中に乗せ、山の奥まで歩いて行った。ある場所へ着いた時に、象は鼻で土を押しやり、中から取り出した象牙を農民に渡し、感謝の気持ちを示した。

酬謝

十六　緝獲兇手（犯人逮捕）

『護生画集』第四集より

ツー州地方のあるお寺で、夜、老僧侶が強盗に殺され、彼の門弟は通報しに官邸に逃げた。そして老僧侶が飼っていた犬も一緒に、官邸に向かって走っていた。ちょうど強盗達がお酒を飲んでいる小料理屋の前を通った時、突然、一緒に走っていた犬は店に入り、一人の客の足に噛み付き、少しも放さない。と、その時、役人達が到着し、犬の行動を不審に思い、その客達を取り押さえ、調べた結果、その客達が老僧侶を殺した真犯人の強盗達である事が判った。

得獲兇手

十七　舊雨重逢（旧知再会）

『護生画集』第四集より

昔、中国の陳州の盧(ル)という軍人が、官邸で、おとなしい鶴二羽を飼っていた。そのうちの一羽が人によって殺され、残された一羽は食べ物も口にせず悲しく鳴き続けた。盧さんがいっぱい慰め、やっと食べ物を少し口にしたが、それでも鶴は彼に向かって悲しく鳴き続ける。盧さんは「あなたは何処かへ行きたいの？　行くと良い！」と鶴に言った。その言葉を聞いた鶴は、暫く主人の頭の上で躊躇した後、空に向けて飛んでいった。

舊雨重逢

三年の歳月が経ち、盧さんは年を取り、病気がちになった。その上、子孫がいないため、一人で故郷に戻り、黄浦渓(ファン プ シ)側の小屋で一人寂しく暮らしていた。秋の終わりのある日、彼は杖を突きながら森を散歩していて、鶴の痛ましい鳴き声を耳にした。頭の上で旋廻し離れて行かない鶴を発見して、盧さんは空に向かって叫んだ。「あなたは私が陳州にいた頃の旧友だろうか？そうであれば下りてきてください。」　その声を聞いた鶴は、盧さんの方に下りてきて、とても親しく振舞いながら、口で盧さんの衣服を噛み放さない。盧さんは喜んで鶴を家に連れ帰り、古い友に接するように再び鶴を家で飼った。また何年か経ち、盧さんが亡くなると、鶴は物が食べられないほど哀しく鳴き、

最終的に主人を追って死んでしまった。

盧さんの親戚や友人らは鶴の行動に感動し、いつまでも一緒にいられるように、盧さんの墓の横に鶴を埋めた。

十八　焚弓折箭（弓を燃やし、矢を折る）

『護生画集』第四集より

休寧（ショ　ニー）県の張村に、張五（ツャン　ウー）という名の猟師がいた。

ある日、彼は、子チ（チ　姿は鹿に似ていて、性格は従順で、人を傷つけない）二匹を連れている母チを追いかけていた。母チは、追われている事にすぐ気がついたが、子チを連れていて早く走れないので、猟師に見つからないよう、先に子チを軟らかい土の下に隠し、自分は死ぬつもりで自ら猟師の張った網に飛び込んだ。

この一連の事を近くにいた張五の母が見ていて、母チの行動に感動した彼女

焚弓
折箭

は、母チのいる網の前に走っていって張五にすべてを話した。そしてすぐに、子チを土の中から救い出し、母チを網から放した。

母チの行動に感動した張五も、たくさんの動物を殺すような今までの自分の残酷さを後悔し、この事をきっかけに、すべての弓を燃やし、矢を折り、二度と狩猟をしないと誓った。

十九　為母乞命（母の命を乞う）

『護生画集』第四集より

フォン州に安(アン)という名前の屠殺業者がいて、母羊と子羊を飼っていた。ある日、安さんは母羊を殺そうと母羊の四本の足を縛った。見ていた子羊は突然、安さんの前に行って、二本の前足をつき、涙を止まらないほど流した。安さんは子羊の行動に驚いたが、母羊を殺す決心は変わらず、とりあえず屠殺用の刃物を一時的に地面へ下ろし、母羊を殺す手伝いをしてもらうために弟子を呼びに行った。戻ってきた時にいくら探しても刃物が見あたらず、

安さんは不審に思ったが、壁の隅で寝ている子羊の体の下にあるのを見つけた。
子羊が母親を殺されないために壁の隅まで刃物を口でくわえて行き、
自分の体で隠したことを知った安さんは、母羊を殺すに忍びないので、
母羊と子羊を一緒に「放生園」に放した。

為母之命

二十　収養（引き取って育てる）

『護生画集』第四集より

村の小道に捨てられた小犬が可哀相に泣いていた。
張元という名の学生は見かねて、飼うつもりで家につれて帰った。
しかし、彼の叔父さんはとても不愉快な声で
「この小犬は何かできるの？　早く捨てて来なさい。」と張元に命じた。
張元は控えめな礼儀正しい態度で
「命あるものはみな自分の命が大事。もしも自然死するのであれば

牧養

仕方のない事だけれど、この小犬は人に捨てられ餓死するかもしれない。
その上、そのまま見過ごす事は、人情の上でも道義の上でも
ひど過ぎる行為だと思う。だから、私はこの小犬を飼う事にします。」
と叔父さんに自分の考えを話した。
叔父さんは張元の話す事に納得し、喜んで小犬を飼う事に賛同した。

二十一　垂死的犬（瀕死の犬）

『護生画集』第二集より

昔、ある小商売をしている人が犬を連れて商品代金を受け取りに出掛けた。帰り道で一休みを終え帰途に向かおうとした時、連れてきた犬が、急に彼に向かって激しく吠え続けたうえ、足を噛んで放さない。彼は犬の行為に段々腹立たしくなり、重傷になるまで犬を殴ってしまった。

仕方なく主人から離れる事しかできなくなった負傷した犬は彼から逃げ出した。彼は暫くそのまま帰り道に向かったが、先ほど休憩した所で財布を落とした事

に気付いた。初めて犬の不審な行動の裏に隠されていた真意を知った彼は、急いで先の休憩場所に戻った。犬の善意を無にした彼は、元の場所で忠実に自分の財布の上にへばり付いている、自分に誤解され殴られて瀕死の犬を見つけた。しかし、犬は戻ってきた主人を見た瞬間、高く、長く一声吠え、そのまま死んでしまった。

垂死的犬

二十二　救傷（救助）

『護生画集』第五集より

ちょうど新詩を完成した私は筆を置き、
一人で詩を吟じる。
突然、机の隅で、蟻のようで蟻でない、
蠅のようで蠅でないものが動いているのに気付く。
私は頭を下げ、自分が目にした光景に驚く。
なんと蟻二匹が、怪我して痙攣しながら歩いている一匹の蟻の足を支え、
ゆっくりと巣に向かっている。

救傷

こんな小さい虫でさえ助け合う事の大事さを判っていて、

本当に敬服し、感動する。

二十三　盲狗待哺（盲犬が育みを待つ）

『護生画集』第六集より

咸渓（シェン シー）地方の童鏞（トン ヨン）という家で飼っている母犬から、賢くて人間の気持ちが良く判る白い犬と模様の付いた犬が生まれた。その後、白い犬は目が見えなくなり、犬小屋に入って物を食べる力さえも失った。飼い主は白い犬を寝かせるため犬小屋の外にわらをひいた。模様の付いた犬は、白い犬が死ぬまで、毎食、食べ物を口にくわえて食べさせ、夜寝る時でも犬小屋に入らず、白い犬と共に外で寝た。

白い犬が死に、飼い主が山の麓に埋めると、模様の付いた犬は毎日欠かさず白い犬の墓に行き、日が暮れるまで、墓の周りをグルグル回ったり、悲しく惜しむように墓の前に伏せて泣いたりしていた。

盲犬待哺

二十四　一犬不至　群犬不食

（一匹でも揃わなければ　すべての犬は食べ始めない）

『護生画集』第六集より

江州徳安県の陳昉（ツォン　ファン）という家には、十三代の家族、合わせて七百名ほどが一緒に住んでいる。使用人は雇っていない。

年寄りも子供も、悪口や噂を言わず、皆、温かく睦まじく暮らしている。

暇さえあれば、全員が大広間に集まり、楽しく過ごす。

この家では百匹ぐらいの犬が飼われていて、一つの食料桶を百匹の犬が共用

一犬不至
群犬不食

している。

食事の時間になると、最後の一匹が食料桶にやってくるまで、

すべての犬は食べ始めない。

二十五　翡翠雙棲（翡翠、木に止まる）

『護生画集』第四集より

魏国の王女はとても美しく、身なりに気遣い、豪華に着飾るのが好きだった。彼女は、お花がいっぱい刺繍された、本物の翠鳥の羽を縫ってあるキラキラした衣服を持っていた。この衣服を身に付けた王女は仙女のように美しかった。ある日、魏太祖は、この衣服を着て宮殿に入る王女を見て、真面目な態度で彼女に「早くその衣服を脱ぎなさい。今後、装飾品に羽を使わないように。」と言った。王女は笑いながら「衣服一枚で使われる羽の数は知れています。」と

返事をした。太祖は「あなたはこの国の王女としてこのような衣服を着ている。貴族や平民の女の人たちが見たら、どれぐらいの人が真似するだろう。そして、商売人が、利益を得たいがため、あらゆる手段を使って翠鳥の羽を手に入れようと、どれぐらいの翠鳥の命を奪うだろう。殺生の原因があなたにあるのであれば罪深い。」と言った。

翡翠雙棲

二十六　逞藝傷生

（芸をみせびらかす為、生き物を傷つける）

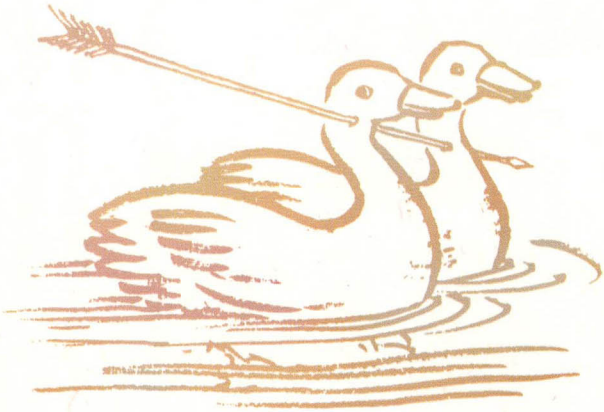
『護生画集』第四集より

庭で読書をしていた仁慈な君主、仁宗（ニン ゾン）は『五代史』に記載されているある物語に納得できなかった。その物語の内容は、

――周高祖が南荘にある池に遊びに行った時、水面に可愛らしく浮かんでいる二羽の野鴨を目にし、すぐに一本の矢を放ち、一度で二羽の野鴨を射た。

これがとても難しい事であって、一緒にいる臣下達は「大王の射術は本当に

逞藝傷生



見事なものですね。」とお世辞を言った。――　というものであった。

仁宗は本を閉じ、側にいる侍従等に、「自分の優れている射術の腕を見せびらかすため、生き物の命を奪う事は、私にとって好ましくない事だ。私は、宮内で十五年間に渡って責任を持って台所を管理している者達に、全ての生き物を、やむを得ない限り、殺して食べ物にしないよう、常々、注意してきた。私は好き放題で命あるものを殺すのが一番嫌である。」と言った。

二十七　放魚（魚を生かす）

『護生画集』第六集より

李沖元（リー ツォン ウェン）は一匹の魚を切ろうとした時に、突然、昨夜に見た夢の内容を思い出した　――ある素朴で飾り気のない婦人が来て、彼に「私のお腹には五千の子女がいて、私が生きていれば、我が子等も一緒に生きる・・・私が死ねば、我が子等も一緒に死ななければならない。だから、私の立場に同情して、私に生きる道をください。」と言った。――

李沖元はこの夢を思い出して、直ぐにその魚を川に放すと同時に、今後、

殺生しないと決心した。

何日か経過し、彼は川辺でとても珍しく貴重なパールを拾った。

放魚

二十八　報告火警（火事を知らせる）

『護生画集』第四集より

上黨(シャン　ダン)県に盧名(ル　ミン)という名の人が住んでいた。

彼は道で餓死寸前の犬を拾い、家で飼う事にした。

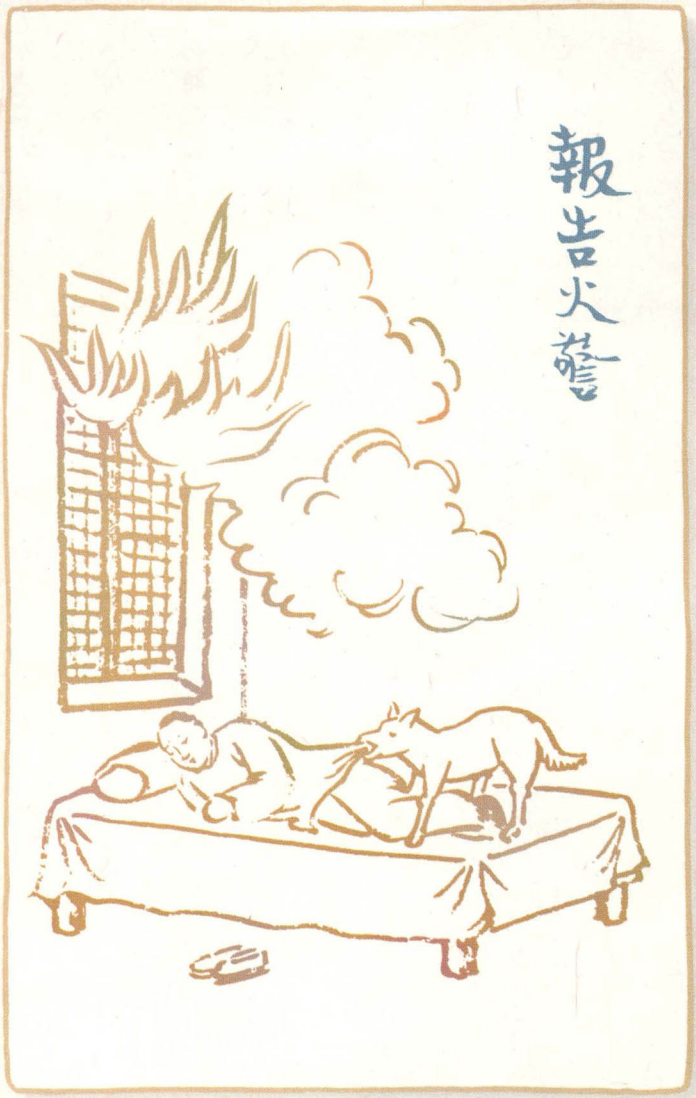
ある夜、盧名は酔っぱらって、ベッドにのぼり、すぐに寝てしまった。

と、その夜、隣の家が火事になった。しかし熟睡している盧名は全然気付かず、

火の勢いは段々と盧名の家にも迫ってきた。

気付いた犬はベッドに飛びのって、盧名の耳元で一所懸命吠え続けたけれど、

酔っていた彼は相変わらず熟睡していた。


報告火警

犬が盧名の衣服を歯でくわえ、むやみにひっぱったり、
引きずったりしているうちに、ようやく盧名は目を覚ましたが、
その時には、もうすでに部屋の戸は火に焼け、家中にも煙がいっぱい。
犬に起こされた彼は、立ち上った煙の中から必死に外へ逃げ出し、
どうにか命拾いした。

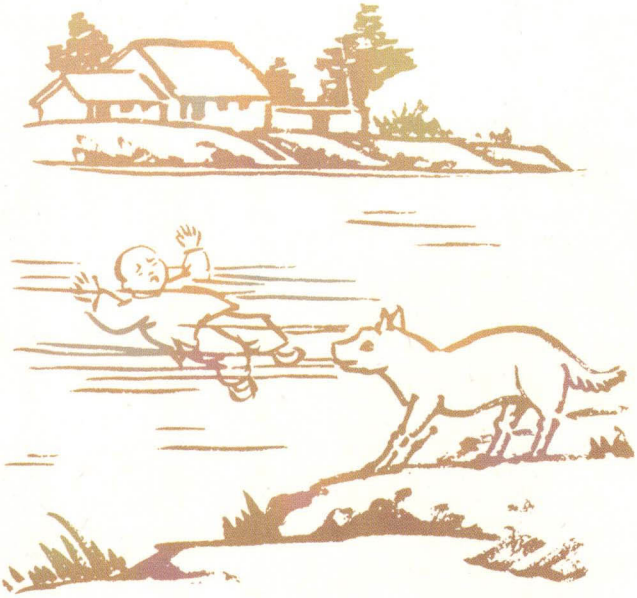
二十九　救命（救命）

『護生画集』第四集より

浙江省湖州に、ある貧しい家族、顔(イェン)さん一家がいた。ある日、夫婦は二人共働きに出掛け、家には五歳の女の子一人だけが留守番に残された。女の子は家の前にある池のそばで遊んでいるうちに、足を滑らせ池に落ちてしまった。家で飼っていた犬が見て、すぐに池に飛び込み彼女を救い出したが、すでに水を飲みすぎて、気を失っていた。犬は顔さんの仕事場に走って行って、声を上げ助けを求めた。顔さんは犬の様子を見て、すぐに家で何かあったと

気付き、急いで家に戻った。犬が知らせにきたため、顔さんはうつ伏せになっている我が子を発見し、命を救うことができた。

救命



三十　我喫素（私は精進料理主義）

『護生画集』第六集より

旅先で友人宅に泊まった旅人に、友人は、特別に鶏を殺して、情熱的にもてなそうと伝えたが、旅人は、自分のために命が奪われなければならない鶏を可哀相に思い、「私は精進料理主義だ」と言ったため、鶏は命を救われた。夜、寝ていた時に、旅人は突然、鶏のせっぱ詰まった長い鳴き声を聞いて、驚き、目が覚めた。もしや狼が鶏を捕まえにきたのではと思って、急いでベッドから起き上がり、鶏篭に向かおうとしたその瞬間、家の塀が倒れ、ちょうど旅人の寝ていたベッドの真上に崩れ落ちた。

我喫素

友人は旅人が死んだと思って見に行き、ちょうど鶏篭から一番近い客室に寝ていた旅人に命を救われた鶏が、恩返しするために、大難がすぐにやってくるのを予知して、旅人に知らせたという事を知った。

三十一　霊犬（俊敏な犬）

『護生画集』第五集より

晉朝時代、呉郡（ウー　チン）人、陸機（ルー　チー）が黄耳（ハァン　オー）という名の愛犬を飼っていた。陸機は、仕事の関係で長年故郷を離れ、首都に住んでいたが、長い間、家族から連絡がないことが気掛かりで、寂しく思っていた。ある日、彼は何の気もなく「あなたは私のために、故郷にいる家族に手紙を持って行ってくれるか？」と黄耳に話し掛けた。

黄耳はしっぽをふりながら、承諾したようにうなずいた。そこで、陸機は家族への手紙を書いて筒に入れ、紐で黄耳の首にぶら下げ、黄耳に預けた。

すると、頼まれた黄耳は道に沿って陸機の実家に向かい、なんと、無事にたどり着いた上、返信まで持って、帰ってきた。普通の人ならば往復に三十日ほど掛かるところを、黄耳は二十数日しか掛からなかった。

それから黄耳は、死ぬまで、陸機と家族の間の郵便配達を務め上げた。

黄耳が死に、陸機は、黄耳に感謝し、その忠魂を祀るため、黄耳をきちんと埋め、「黄耳塚」と称した碑を立てた。

靈犬

三十二　運糧（食糧を運ぶ）

『護生画集』第二集より

皆さんは蟻が食糧を運ぶ過程を見た事があるだろう。

彼らは、助け合う精神と、多くの智恵や力を合わせる団結力とを充分に発揮し、いくら困難な地表や長い道のりを歩いても、決して長い行列の秩序を乱すことなくきちんと整列し、一所懸命に、前へ進んで行く。

たとえ危険に遭ってこけてしまっても、気落ちせず勇敢に立ち上がって、再び行列に戻り、絶対に困難に負けない信念とやり遂げるという決意のもと、自分の役目を忠実に果たしている。

運糧

こんなに小さな虫たちから、個を犠牲にしても全体の目標を完成させるという精神を見ることができ、我々、人間は、本当に彼らを褒め称えるべきであろう。

三十三　児戯（子供の戯れ）

『護生画集』第一集より

子供に善行の大切さを教えるという心があるのならば、小さい頃から、正しい観念を教えなければならない。なぜならば、大抵の人間は先入観を持っていて、特に、偏見はその人の一生に影響し、その上、変える事はなかなか難しいからである。そして、長年に渡り教える事で、慈悲心や、万物を愛する心を養うことができるからで、そうすれば、自然と、勝手気ままに生き物を傷付けたりしなくなる。

このように、小さい頃から善い考えを持って大人になれば、きっと、崇高で才徳のある人や仁慈な君主が持つような、偉大な人格の持ち主になれる。

児戯

護生画集（日本語版）

原　著　□　弘一法師
原　画　□　豊子愷居士
発　行　□　釋悟謹
総　編　集　□　釋悟謹
日本語翻訳　□　大西里沙
日本語校正　□　吉村三紀子
文字編集　□　許櫻馨
美術編集　□　張曉玲
連　絡　処　□　台中市大雅路236號7樓

造本には充分注意しておりますが、万が一、
誤字、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、
「連絡処」あてにご連絡ください。

二〇〇二年十月　再版発行

歓迎助印・功德無量
FOR FREE DISTRIBUTION (This book is not to be sold)